ヒロシマ ユネスコ

ユネスコ会員綱領

心の中に平和の守りを固めよう
すべての人間の尊厳を重んじよう
教育・科学・文化の発展に努めよう
民族間の疑惑と不信を除こう
世界を友愛と信頼のきずなで結ぼう

第三次日中友好訪中団出発にあたって

広島ユネスコ協会常任理事　伊東亮三

一九七二年の日中共同声明による日本と中国の国交正常化からこの九月二十九日でちょうど二十年。この時にあたり、日本と中国の長い交流史上初めて天皇陛下が、この十月下旬に中国を訪問されることになった。

この天皇訪中と同じ時期に北京ユネスコ協会との友好姉妹協会締結に基づく第三次の訪中団として中国を訪問することになったことは、まことに光栄のことと考えている。

一九八四年からの日本ユネスコ協会連盟と中国教育国際交流協会との友好交流計画が、新たに地域ユネスコ協会間の友好姉妹協会締結へと発展することになり、広島ユネスコ協会が中心となって、一九八八年十月十八日北京市で、岐阜県ユネスコ協会とともに、北京ユネスコクラブとの間で「日中ユネスコ友好姉妹協会締結書」に調印した。

それが北京ユネスコ協会との交流の始まりであるが、その時の訪中団中、本ユネスコ協会会員は、団長としての加藤朗一副会長、信井正行副会長、新川貞之常任理事の三人であった。この締結書の発効は、次の年の平成元年であり、有効期間は四年であった。

翌一九八八年、相互訪問の約束により、北京から蔣団長以下七名の訪日団が来広され、広島ユネスコ協会員との友好を深めたが、その年はたまたま「海と島の博覧会」があり、見学もされたのも嬉しい。

次の年一九九〇年十月、第二次の代表団が訪中した。広島ユ協からは副団長として深崎敏之副会長、太鼓矢晋、末野忍両常任理事が参加されたが、この年は国際識字年にあたり、識字教育をテーマに見学や学習をされてこられた。とくに内モンゴルまで行かれ、蒙古族の識字学級と交流されてこられたことは特筆すべきであるが、内モンゴルの首都ホフホト市から南西三六〇キロの識字学校まで、悪路を車で走られたというのは銘記しておきたい。

翌一九九一年秋、北京からは高団長以下七名の方が来日された。その来広時のレセプション会場で、広島市教育センター長小西清彦氏より訪日団に対して、小・中学校教科書交換の提案があり、それを受けて、年末に北京ユネスコ協会から同センターに教科書が贈られてきた。その国の教育内容を知るには教科書が最適であり、貴重な贈り物であった。こちらからも小・中・高校の教科書が北京に送られた。

そして今年、交流協定の最終年となり、第三次の訪中団が出発することとなった。団長は不肖伊東亮三常任理事、他に亀井章、古田碩永両常任理事の他に、今回はじめて女性の参加者として竹沢臣子理事が加わった。その他岐阜県ユネスコ協会二名に新たに郡山ユネスコ協会から一名、福島ユネスコ協会から二名が加わったのが今年の特徴である。

さて、一九八九年から四年間の交流が行われてきたわけであるが、この交流を続け、友好をより深めたいとの希望により、新たに一九九三年から四年間、北京ユネスコクラブとの友好姉妹協会の関係を続けることになり、本訪中団は、その締結書の調印を行ってくるという使命をもっている。新しい協定では、岐阜県ユ協が降り、郡山と福島のユネスコ協会が加わる。

ついては、今回は四年間の友好関係の締めくくりとともに来年からの新しい交流の基礎を堅く築いてくる決意である。

（訪中団は10月20日成田発、北京、上海を経て三〇日帰国）

訪中団メンバー（広島関係）

▼伊東亮三（広島ユネスコ協会常任理事。広島県ユネスコ連絡協議会長。広島大学教育学部教授、同付属小学校校長併任）
▼亀井章（同協会常任理事。中国放送事業部副部長。ヒロシマ国際アマチュア映画祭事務局）
▼古田碩永（同協会常任理事。広島市同和対策第一課長）
▼竹沢臣子（同協会理事。広島市立舟入高校ＰＴＡ会長）

編集・発行／広島ユネスコ協会（事務局：広島市東区牛田新町１丁目８－３　広島市牛田公民館気付　☎〈082〉227－0706）

総会開かる　新役員を選出

一九九二年度広島ユネスコ協会総会を5月16日、広島市国際会議場で開き、年度計画と予算を審議、決定。役員を左記のとおり選出した。

名誉会長　平岡　敬
顧　問　永井滋郎、沖原　豊、古川浩司、河村盛明、倉田信雄
会　長　松原博臣
副会長　加藤朗一、信井正行、深崎敏之
常任理事　太鼓矢晋、本家正文、伊東亮三、山崎克洋、新川貞之、末野　忍、永田龍男、北川健次、亀井　章、内田憲至、高橋昭博、古田碩永
理　事　上本忠則、溝上　泰、平岡豊恵、瀬田　洋、水野文隆、上田義文、長迫凱朗、末森　巌、中谷美穂子、熊崎賢三、藤井正一、由田千鶴子、山本隆信、藤井孝行、木原　亮、竹沢臣子、木村進匡
事務局（兼）信井正行、上橋穏韶、国田　繁
幹　事　吉岡尊治、成田鉞雄

全国大会に参加して

信井正行

本年度のユネスコ全国大会が9月26、27日の二日間、爽やかな初秋の気漂う香川県丸亀市で開催され、広島協会から、河村、倉田両顧問、深崎副会長と私が出席した。

海外からのお客さまとして世界ユネスコ協会クラブセンター連盟のポール・アコト・ヤオ会長（コートジボアール）をはじめ、東アジアの中国、韓国、モンゴル、ロシア等の代表を迎え、全国から六〇〇名の参加者を集めて開幕した。

大会は中国琵琶のオープニングコンサート（中国の女流演奏家・唐華さん）で幕が上り、高島隆平・日本ユネスコ協会連盟会長の挨拶で開会する。

基調講演は地元香川県出身の画家、猪熊弦一郎画伯の「自然と人間」。戦後間もなく自動車でアメリカ大陸を横断した時の体験談である。一九〇二年生まれの90歳とは思えぬ若々しい風貌と声に圧倒される。

シンポジウムは「青年と未来・文化の継承と創造」をテーマに、展開された。パネラーは、日本の赤潮研究の第一人者で海洋環境学が専門の岡市友利・香川大学々長、片倉もと子・国立民族学博物館教授（湾岸戦争開戦時の片倉クエート大使夫人）、それに鈴木佑司・法政大学教授（日ユ協連国際委員会委員長、世界ユネスコ協会クラブセンター連盟副会長）の三氏であった。

20世紀は単一文化の時代。21世紀は多様性の時代。思い切った説が次々と講師の口からとび出し、会場からの質問も鋭いものがあり、2時間余の討議はあっという間に終る。

2日目は猪熊弦一郎美術館、丸亀城、資料館等に別れて見学、研修。締めくくりの全体会議があって正午閉会。近年にない充実した大会であった。

東アジア会議にも出席

全国大会に先立つ9月25日、高松市で東アジア地域民間ユネスコ活動振興会議が、アジア太平洋ユネスコ協会クラブ連盟、日本ユネスコ協会連盟の主催で開かれ、出席の要請があって、こちらの会議にも出席させてもらった。

会議は中国、韓国に加えロシア、モンゴルの代表を迎えて開催された。

1、各国民間ユネスコ活動の現状と課題
2、相互の協力と今後の交流
3、非識字者減少への国際協力

第2のテーマに関連して、日中民間ユネスコの交流についてあらかじめ主催者から広島協会から説明するよう要請があり、広島・北京ユネスコ友好姉妹提携の経緯と今後の計画について説明した。

一九八九年の天安門事件直後の、緊張した国際関係の中での第一回北京側代表団の来訪なり、昨年の第二回訪日団との教科書交換の話し合いの結実なりに、NGOとしてのユネスコ活動ならではの妙味を見出したことも付け加える。

会議は、高松市のホテルラポールイン・タカマツで、昼食を挟んで9時から17時まで続けられ、閉会した。

閉会後、香川県知事主催のレセプションが催され、中国代表団のひとり北京市ユネスコクラブ顧問、（北京市教育局督学室次長）の刘鉄岭氏と歓をつくし、今後の交誼を約して別れた。

（広島ユネスコ協会副会長）

結成記念事業委設置

来年、広島ユネスコ協会が結成20周年を迎えるに際し、記念事業を策定するための検討委員会（委員長は伊東亮三常任理事）を設置することが、本年度の総会で決定され、二回にわたる委員会で事業案が審議された。

なお、委員は次の11名。

太鼓矢晋、山崎克洋、水野文隆、新川貞之、末野　忍、永田龍男、亀井　章、高橋昭博、古田碩永、伊東亮三、信井正行。

（敬称略）

パリ・ジュネーヴ・ウィーン

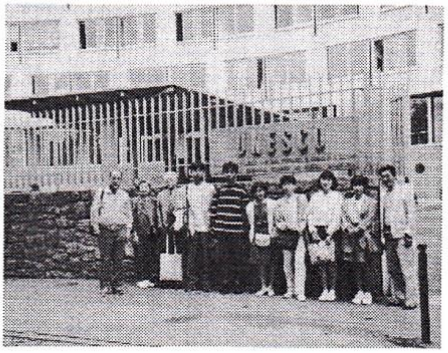
第二回ユネスコ高校生海外研修報告

深崎敏之

（広島第一女子商生徒二名、広大附属高校生女子二名、男子二名、永田龍男常任理事、倉田信雄顧問夫妻、と私一〇名で、八月二十二日大阪を飛び立ち、八月三十日帰国。）

パリでの研修の中心は、北西にエッフェル塔を眺め、正面入口前にナポレオンが学んだ陸軍士官学校をみるユネスコ本部を訪れたことであった。出発前に広島オーストリア協会光井安子さんに案内をお願いして頂いた広瀬さん（人事局長）が休暇で、代って文化局自然遺産部の村井恵美子さんが案内をされた。

ユネスコは一九四五年創設された時は加盟国は三〇カ国であったが、現在は一七〇カ国である。日本は一九五一年西ドイツと同時加盟である。予想していたより大きなビルで、一九五八年完成したもので、土地の提供はフランス政府である。総会議場、理事会議室を見学して中庭に出る。日本庭園がかなりのスペースをとり、松や櫻がよく成長し、池には赤い鯉が泳いでいる。大きな花崗岩に絶えず水が流れ味（和）の字が刻まれたイサム・ノグチ氏の作品がある。石がもっとも自然を表わしたものであるといった彼の思想が、皆んな仲良く力を合せて自然を護れといっているようであった。その西側のビルの外壁に長崎市被爆資料である浦上天主堂の聖者像の顔右半分がひどく損傷したものが、四メートル位の高さの位置にはめこまれ、原爆被爆のすさまじさを示している。ビル内の壁にはピカソをはじめとする芸術家たちの大作が展示され、文明と文化を考えよといっているようだ。期間を限ってのテーマごとの展示も行われている。世界の文化遺産展示はきれいな模型で、常設展示である。最近は訪問客が多く、忙しくなったとのことである。それでも他の美術館などに較べると訪問客は少ない。アメリカ、イギリス、シンガポールのユネスコの早急の復帰とユネスコ活動の重要さを各方面へ情報提供することが必要だと痛感した。



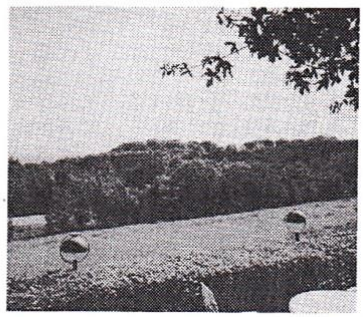
ユネスコ本部前で

八月二十五日パリにあるリョン駅からTGV（超特急）で約4時間でジュネーヴに到着。レマン湖を見下し、雪を頂くアルプス最高峰モンブランを眺める国連欧州本部を訪問。旧館は一九三六年、国際連盟本部として建てられ、天井が高い。スペイン人、ホセ・アリア・セルトが心血を注いで平和の実現を願って描いた絵が、天井と周囲三面の壁にあって、迫力がある会議室は、現在もなお軍縮会議のために使用されている。北側に新館が一九七三年に建てられ、三十二の会議室一六〇〇の事務室がある。ジュネーヴ市の人口は十七万人、二〇〇にも達する国際関連機関があり、人口三分の一がこれらに勤務しているということである。銀行の多い都市で、丁度日本の郵便局といった感じで、円の交換が実に簡単であった。

八月二十七日ジュネーヴ空港を飛び立った飛行機は約一時半の後ウィーンの空の玄関シュヴェヒャート空港に到着、約三十分でウィーン市に入る。シェーンブルン宮殿とIAEA、UNIDO等のある国連都市は予約制である。これらに訪問する前に予約の必要のないベルヴェデーレ宮殿の庭、ベートーベン、シューベルト等の眠る中央墓地、北ウィーンの森等を訪れた。ハプスブルク家栄華のシンボル、シェーンブルン宮殿の公開されている四十室を見学し、十八世紀ウィーンがいかに栄えていたかを知った。二十八日ニューヨーク、ジュネーヴに次ぐ第三の国連都市実現を目指しているウィーン国際センターを訪れた。生徒は英語によるガイドに案内され、ドナウ運河の東にある広大な敷地に建てられた七つの建物に十二の国連専門機関の本部があって、オーストリア政府の熱心な誘致によって出来上ったこのビルを不思議そうに見入っていた。入るのにはかなりの検査があり、整備のきびしさ、オーストリアの国際情勢の不安定さを感じさせた。

現在日本のマスコミがよくとりあげているEC問題であるが、オーストリアもスイスも永世中立を表明しながら、EC加盟を正式に申請している。国民投票の結果どうなるであろうか。フランスも九月二十日マーストリヒト条約の可否についての国民投票があった。いずれにしてもヨーロッパ統合への現実はきびしいようである。やがて日本もアジアでこれと同じような悩みに遭遇するであろう。生徒はヨーロッパの多様性、各都市のもつ歴史の複雑さを感じとっていた。三都市の中ではパリの自由さ、郊外に出るとすばらしい自然のあるフランスに憧れていたようだ。帰国後生徒のご家族から、この度の旅は最高の幸せだったと申していますという手紙を頂き、ほっとした。最後に今年も多額の助成を賜わった（財）多山報恩会に心から感謝する。

（広島ユネスコ協会副会長）



カーレンベルクのウィーンの森

「市長、女優をゲストに「サロン」活況」

広島ユネスコ協会の月例行事となった国際交流サロンは、今年度に入っても、ひきつづき内外の多彩なゲスト・スピーカーを迎えて活況を呈しています。

広島市長登場

今年度のスタートを飾ったのが、広島ユネスコ協会の名誉会長でもある平岡敬広島市長をお迎えしてのサロン（5月16日）。

「国際平和文化都市広島市長就任一年を経過して」と題する講演は、当サロンのレギュラー会場を平和公園内の広島国際会議場コスモスの間に移し、約百三十名の参加者を集めて、行なわれた。

市長就任後一年余にわたる期間に同市長が訪問されたハノーバー、ベルリン、ストックホルム、ニューヨーク、ウィーン等での見聞をもとに、「国際化とは何か」「核廃絶と広島市の果たすべき役割」「アジア大会の意義」など、が熱っぽく語られた。

日系米人を迎えて

6月（27日）のサロンの講師は、広島市が市内の中学校、高校の英語講師として欧米から招いている教員の一人、アメリカ国籍のジーン・関舎氏。

広島からの米移民を先祖にもつ同氏は、広島滞在三年間の体験をもとに、日本の英語教育について、また、生徒の生活態度について、自国の例と対比しながら話題を展開された。その中でアメリカの日系人仏教徒家庭における信仰生活としつけの話が日本では失われつつあるものに気付かせる点で、サロン参加者の注目を集めた。

乙羽信子さんと映画

8月（7日）のサロンは、原爆被爆記念日の翌日とあって、映画「原爆の子」（新藤兼人監督、乙羽信子主演）を乙羽さんと共に見る会として開かれた。

「原爆の子」が製作されて今年が四十年目。スクリーンに映し出される一シーン、一シーンに広島のまだ残っている傷痕と緒についたばかりの復興への足どりを見ながら、参加者はそれぞれの思いに浸っていた。その中で、乙羽さんがソッとハンカチで涙を押さえられる光景があった。

上映後、中国放送井尾義信アナウンサーの聞き役で乙羽さんが、四十年前の映画づくりの苦労と喜び、当時の広島の街と広島の市民について、深い感懐をたたえながら、しみじみと語られた。

難民救援がテーマ

9月（26日）のサロンは「クルド族の難民救援活動に参加して」と題して広島赤十字看護専門学校専任教師、坂本成美さんの話を聞いた。

白衣の使節として医療活動を献身的に展開した坂本さんは、イラン、イラク、トルコの国境をさまよい苦難を強いられているクルド族の実態を生なましくレポートし、参加者は厳しい世界情勢の一端を学ぶことが出来た。

国際問題講演会を共催

広島ユネスコ協会では、国際交流サロンのほかに、大規模講演会を単独主催で、ある時は共同主催で開催しているが、本年6月13日、「最近の国際情勢」のテーマで講演会を催した。

講師の外務省報道官英正道氏は、世界の東西冷戦の終結をはじめとして旧ソ連の解体、東欧での民族独立の動きなど最新の国際情勢を外交の最前線に任ずる一人の外交官として語られた。

なお、本講演は、広島市国際交流協会、広島カナダ協会、広島オーストリア協会、広島日タイ友好協会そして日本外交協会との共催で行なわれた。

国際交流サロン案内

期　日　11月14日（土）
テーマ　ありがとうで国際交流
講　師　ヒューマンウェア研究所　代表取締役　清水英雄先生

※会場は広島市本通り、アンデルセン
※開会時刻は午後2時
※会費は千円

◆　◆

〈12月度サロン〉

第3次日中友好訪中団の報告会を、訪中団メンバーを囲んで開催します。会は、広島ユネスコ協会の年末懇親会も兼ねますので、期日、開場は追ってお知らせします。